

あらわになった二條家屋敷 〜摂関家の近世屋敷の発掘成果〜

大学歴史資料館准教授

若林邦彦
わかばやしくにひこ

2013年8月より、同志社女子中高・同志社女子大の今出川校地内では、校舎建設に先立つ発掘調査を行っています。調査は同志社大学歴史資料館教員と同志社女子大の調査員が中心となって行っています。

調査地点は女子大今出川校地の西北部と女子高西部にあたり、いずれも17世紀・19世紀に、摂関家の一つである、二條家の屋敷がおかれていました。2013・2014年に行っている校舎建設に先立つ発掘調査では、屋敷の変遷が明らかになってきました。これは延宝三（1675）年大火の焼土層やその後の洪水層・天明八（1788）年の大火焼土層に覆われて屋敷地の生活面がはつきりと残っていたためです。

二條家がこの地に屋敷を構えた江戸時代前半（17世紀中頃）の堆積層では、南北・東西方向の礫敷き道路がみられ、その区画にそって礎石建物がみつかりました。南面する今出川通りから牛車などを屋敷建物脇に乗り付けるための施設でしょう。

江戸時代後半（17世紀後半・18世紀）には、前代の石敷き道路の脇に溝が設けられ、屋敷地内を区画していたようです。また、渡り廊下をくぐる石組通路などが多くみられ、多数の建物

があったことがわかります。また、蔵などの建物とともに、漆喰つくりの池もみつかりました。

江戸時代末（18世紀末・19世紀中葉）には、屋敷地の東半には漆喰つくりの池が広範囲に設けられていました。みつかった石組溝・土管のいくつかは池からの排水施設と思われます。幕末動乱期に大規模で壮麗な庭を作っていた様子がうかがえます。さらに、同志社女子大北端の2a調査区では、屋敷地北辺の築地塀の基礎が確認されました。

江戸時代の摂関家の屋敷の配置変遷がこれほどはつきりと見える例は少なく、貴重な成果と言えるでしょう。

また、出土遺物のなかには、「乾山」銘のある陶器片が出土しました。尾形乾山が始めた乾山焼は有名な近世陶器です。二條家の邸で光琳と乾山の兄弟による御庭焼がつくられたといえます。「乾山」銘陶器は工芸家のパトロンとしての二條家を示す品と考えられます。さらに、二條家の家紋「下り藤」をかたどった瓦が、多数出土しています。公家屋敷にふさわしい壮麗な屋根だったのでしょう。日常雑器にも、二條家家紋があらわれたものが多く見られます。摂関家にふさわしい特注品が使

われていたと考えられます。

このように、公家とは何なのかについて、発掘成果にもとづく貴重な発掘調査成果が次々と明らかになっていきます。こういった成果が、記者発表により新聞・テレビ各社に報道されることとなりました。さらに、市民に公開するべく、2014年5月31日に発掘調査の現地説明会を開催しました。30℃を超える真夏日のなかでしたが、約500人の参加者を集め、盛況のうちに終えることができました。参加者からは、江戸時代の公家の暮らしぶりについて、検出された遺構などをみて様々な質問や感想が寄せられ、調査者である我々の刺激になりました。また、乾山焼に関心を持つ方々が多く来場され、出土した「乾山」銘陶器に見入っていました。

調査には、同志社大学の学生をはじめ多くの学生スタッフが参加し、考古学や歴史研究の手法を学んでいます。調査は教育の場でもあります。これは大学が行う発掘調査の特徴です。大学や法人の外部だけでなく、内部の教学にも資する場として発掘調査を運営していきたいと考えています。

また、同志社女子中高校舎建設地点でみつかった井戸や石組遺構は、女子中高の尽力により校地内で移築して復元展示を行います。今後、二條家屋敷のあったことをしめす「実物」として多くの方にご見学いただければありがたいです。

発掘調査は、2014年の8月上旬に終了し、今後は発掘調査報告書の作成を行います。遺跡調査成果は、発掘調査データの公開を終えてはじめて世の中に「存在する」ことになります。今後はこういった作業と共に、同志社大学歴史資料館による展

示企画を通じて広く市民に調査成果と、今出川キャンパスの歴史的価値・「京都の中の同志社」の具体を、伝えていきたいと思っています。



現地説明会の様子1



二條家家紋の瓦



現地説明会の様子2



「乾山」銘陶器

同志社大学リサーチ・アドミニストレーション センターの発足にあたって

研究開発推進機構長
リサーチ・アドミニストレーションセンター所長

わたなべよしあき
渡辺好章

科学技術イノベーションの推進は日本再興戦略の重要な柱であるが、経済力のみならず研究力においてもわが国の国際競争力の低下が危ぶまれている。これを受けて国が今後10年間でトップ100に10校ランクインを目指す方針を打ち出したことから、大学の世界ランキングは衆目を集めている。さらに、文部科学省は、2013年度から文教施策における重点事業の一つとして、科研費をはじめとする「競争的資金の獲得状況」や高引用度論文数の割合及び国際共著論文の割合に見る「国際的な研究成果創出の状況」、さらには共同・受託研究受入実績額及び特許権実施等収入額とそれらの伸び率に見る「産学連携の状況」といった、定量把握が可能な研究活動指標に基づき、少数の対象機関を選定し、大規模な支援を行う「研究大学強化促進事業」を展開している。

このような環境下で、本学はどのような研究体制を取るべきであろうか。国が示しているような基本的な研究評価項目へ注力することは当然ではあるが、まずは、本学らしさをより明確に打ち出せる研究ポリシーの確立が重要であろう。すなわち、本学としては、ランキング向上や補助金配分額の増加を自己目

的化することなく、教育理念の一つである国際主義を標榜するにふさわしい世界水準の研究力を備える姿勢が肝要であろう。グローバル基準に適う大学としての存在を確固たるものとするこそが、同志社二百年の大計への大きな一歩であることを自覚しなければならない。

さて、このようなグローバルな視点から大学の研究力向上を考えるならば、研究開発内容について一定の理解を有しつつ、研究資金の調達・管理、知財の管理・活用等をマネジメントする人材がわが国の大学では十分には充足されていない。そのため、研究者に研究活動以外の業務で過度の負担が生じており、これがわが国の研究力の伸び悩みの原因の一つであるとする文部科学省の認識は、本学の研究環境の現状に照らし合わせても大いに参考すべきであると思う。実際に米国等諸外国においては、研究経歴を有しつつも自らは専ら研究を支える業務に従事する職能集団が、大学行政あるいは研究業界の中で既に一定の地位を占め、彼らの存在が諸外国のイノベーション推進に大きく貢献している。

本学が、世界を舞台に高い研究力を背景とした魅力ある総合大学としての不動の地位を築き上げるためには、創造性豊かな研究成果の創出とその社会への還元を継続的に行っていく必要がある。その根幹となるのが研究者たる教員一人ひとりの着実かつ発展的な研究活動であることは言を俟たないが、これを継続的なものとするためには、研究者個人の努力の蓄積が確実に大学としての研究力向上に繋がり、その結果がさらなる研究活動充実への意欲を喚起させる上昇スパイラルを生み出すような研究支援体制の構築がこれからの大学に課せられた使命であろう。

「本学の特色を活かした先端的、学際的研究拠点を形成し、研究支援業務を統括的に行う」ため、研究開発推進機構が設置されたのは2002年度のことである。以降本機構は、本学の特色ある研究を推進する「研究センター群」、産学連携プロジェクトを推進する「寄付研究プロジェクト群」、社会との連携の窓口となる「リエゾンオフィス」、研究成果を社会に還元する「知的財産センター」による構成を堅持してきた。しかしながら、2011年に閣議決定された「第4期科学技術基本計画」では、科学技術イノベーション政策に関わる取り組みを実効性のあるものとしていくため、専門知識を活かして研究開発活動全体のマネジメントを担う人材の育成・確保が強く求められている。さらにこれを背景として、文部科学省はリサーチ・アドミニストレーター (University Research Administrator、以下「URA」という。) を育成・確保するシステムの整備を急速に進めている。この間、URAのスキル標準や研修・教育プログラ

ムが策定され、「研究大学強化促進事業」においては、URA人材の活用が必須の取り組みとされるなど、わが国でリサーチ・ユニバーシティを標榜する大学においては、URAの存在がにわかにクローズアップされてきている。このような状況に鑑み、本学のグローバル展開推進には、研究推進体制の新たな枠組みの構築が早急に必要との観点から、このたびあえて期中の2013年11月にリサーチ・アドミニストレーションセンター (以下「URAセンター」という。) の設置を断行するに至った。これは、研究開発推進機構発足以降初めてとなる大幅な機構改編である。

本学は、国や他大学の動向に注視しつつも、単に時流に乗ることなく、「私学同志社」に最もふさわしいリサーチ・アドミニストレーションシステムの構築を検討した。その結果、今後も固有の機能を有し続けるリエゾンオフィスや知的財産センターに加えて、あえて別個にURAセンターを設置し、ここに特定任用研究員たるURA及び研究支援員たるARA (Associate Research Administrator、以下「ARA」という。) を配置したのである。URAセンターには、従来からの研究単位である学部・研究科や研究センター等の枠を超えて、全学的な大型研究プロジェクトの開発・運営支援を推進できる機能が求められるが、これを実現するためには、URA及びARAそれぞれの専門性を生かしての「チーム」による活動が必須となる。そこで、所長の下URA及びARAを構成員とし、固有の責任体制を有するURA組織を研究開発推進機構傘下の組織として新たに

編成した。2014年度は3名のUR Aと1名のAR Aが理工系及び生命系を中心としつつも文理融合、人社系を含めて全学的に研究開発推進・支援を行う体制となっている。

UR Aセンターの事業内容は、全学的な研究戦略策定に関する事項といわれるブレアワード（大型公的研究資金を中心とした、全学的な研究戦略に基づく大型研究プロジェクトの創出、大型の公的研究資金の獲得に係る情報収集及び関係機関との折衝、大型公的研究資金の申請支援他）及びポストアワード（研究プロジェクトの進捗管理、予算・人的管理、成果発信他）に大別される。これは、本学における研究開発推進のマネジメントを統括的に行うことや研究者がより一層研究活動そのものに専念できる環境の整備・構築といった、従来の研究開発推進機構では十分に備わっていなかった機能の具現化に他ならず、これを通じて本学の研究活動をより一層充実・発展させようとするものである。

本学が世界に通用する研究大学としての地位を確固たるものとするため、研究開発推進機構は、UR Aセンターの設置に続けてさらなる飛躍に向けたいくつかの施策も検討している。具体的には、大学全体としての研究に関する議論の場の形成、ならびに世界水準の研究成果を大学院教育に還元するための高等教育研究機構を含めた、本学の研究機能の強化に向けた組織のあり方に関する検討であり、これらの将来展望にはUR Aセンターの存在は不可欠である。このような機能を有するUR Aセンターが本学の研究開発推進の核となり、教員一人ひとりの研

究者としての一層の意欲向上を通じて、本学の研究大学へ向けた研究実績の増加へと繋がることを願ってやまない。



国際教養学科の留学事前指導

同志社
クローズ・アップ

女子大学学芸学部教授 鈴木健司

国際教養学科の留学

同志社女子大学学芸学部国際教養学科は、英語圏の大学への留学を必修としてカリキュラムに組み込んだ定員80人の学科として、2007年4月に開設された。学生は2年次春学期から3年次春学期までの1年間、英語圏の協定大学へ留学する。留学先は5カ国（アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド）28大学（2014年現在）で、1大学への派遣人数は原則5人までに限定している。2013～14年度（第6期生）までに540人が渡航し、全員が無事に留学を完了した。今秋も90人が留学開始予定である。

留学を滞りなく実施するための科目として「Oversea Studies Preparation／留学事前指導」を留学前の3セメスターにⅠ、Ⅱ、Ⅲと設置している。英語名称が端的に示すように、ここにはTOEFL受験や安全教育、各種申請手続の説明など、実務的な留学準備が多く含まれるが、そのような当初の想定を超えた形での教育効果が表れていると感じられるようになってきた。

学年を超えた学生同士による学び

1年次の留学事前指導における中心的事項の一つは、留学先の希望大学を選択するための情報を提供することである。春学期の国別留学先説明会では、職員による網羅的な説明の後に、一部の大学について、すでに留学を終えた3、4年次生が自身の留学体験に関するプレゼンテーションを行う。1年次生にとっては、これが将来の留学生生活を具体的にイメージする最初の機会となる。

3年次生が全員帰国し4年次生も就職活動を終える秋学期には、より多くの上級生の参加を得て、座談会形式の留学先説明会を行う。1年次生は、教室内で大学別に実施されるセッションを順次巡って、対話を通じて留学の実情について詳しく知る。留学先決定後の2年次春学期には、学科事務室の手配により随時、大学別に上級生と下級生の懇談の場が設けられる。こうして、学年を超えて親身に教えてもらう緊密な人間関係を築いた学生たちは、留学終了後は教える側へと役割を転じていく。これら一連の説明会等は、下級生にとっては、学生の視点か

らの最新情報を得る機会としての意義に加えて、上級生をロールモデルとして将来の自分を想像し、留学への意識を高める効果をもたらしている。上級生にとっては、自身の留学の意味を再確認するとともに、自己の体験を他者のために生かすことの喜びを知り、後輩を教える経験を得る場ともなっている。

同女生として・同志社人として

異文化での生活に臨むにあたって、自分に関わることにについて適切に語れることの重要性は言うまでもない。とりわけ同志社の一員として留学をめざす以上は、アメリカの大学を卒業し学位を取得した最初の日本人である創立者・新島襄について、十分に理解を深めてほしいところである。

そこで2年次春学期では、「新島襄と留学―同志社を知る―」と題した講義とフィールドワークの機会を設けている。新島襄について、まず教室で学ぶ。後日、同志社大学今出川キャンパスで同大生の案内によるツアーに参加し、同志社女子大学今出川キャンパスで栄光館及びジュームズ館と史料室を見学、最後に新島旧邸を見学というのが、例年のコースであった。本年度は休館中の新島旧邸に代えて、新装成ったハリス理化学館の同志社ギャラリーを見学した。

自学科の少人数クラスの枠組で学ぶ時間が長い国際教養学科の学生にとって、京田辺キャンパスを離れ今出川の伝統的事物に触れることは、学内異文化体験であり、同志社人としてのアイデンティティを新たにする貴重な機会でもある。本学の在学生アンケートによれば、国際教養学科の学生は、建学理念（キリスト教主義・国際主義・リベラルアーツ）の内容に対する認

知度の割合が例年概ね70%台で推移し、日頃の学生生活の中で建学理念を実感する割合も比較的高い。

今後の展望と課題

学年を越えた学生同士による学びは、上級生のボランティア的献身によるところが大きく、これが若い学科の伝統として根付きつつある。一方、上級生の学びの単位化という観点から、カリキュラム再編へとつなげるという選択肢も考えられる。

今出川見学は、場所に新鮮さはあるものの、見て回る行動自体は、ともすれば受動的になりがちである。同女生としての意識が高まるほど、なぜ「隣の大学」を見学するのかという疑問を感じる学生も少なくない。

国際教養学科の留学事前指導について、確かな成果を実感する一方、検討すべき課題も顕在化してきたこの頃である。



上級生による留学先大学説明



大学今出川キャンパス見学

同志社 クローズ・アップ

美術×政治コラボレーション授業「学校をアートで満たそう」を通して学びの在り方について考える

中学校・高等学校教諭

橋本侑佳

授業のきっかけは生徒の声から

今回の課題は、「みんなで何かをつくってみよう」という生徒の声から始まった。授業を創るうえで、発達段階、教科のねらい、生徒観等、さまざまな要素を考慮することは当然である。しかし、私は教員の一方的な課題設定に違和感を覚え、生徒の興味関心や学びへの姿勢に耳を傾けることも必要ではないかと感じていた。偶然、3学期の授業で、「社会の課題を解決するための何らかの表現を試みたい」という政治の授業担当者との思いも一致した。

生徒にとって美術（以後アート）の諸活動が、アーティスト等一部の興味のある人や授業内に限定されたものではなく、社会とのつながりや日常生活の中で密接に関わっていることを伝える手段になるのではないかと。教科の枠を超え、さまざまな知識を一つのものに関連させていく中で、本来のアートの持つ可能性を生徒が経験を通して学びに変えていけるのではとの思いから、社会科政治とのコラボレーション授業が決まった。

学びは自分たちで深めていく

紙を扱う会社、大和板紙株式会社からの協力を得て、共通の素材として硬質の段ボールを用意することができた。グループは3〜6人で、制作期間は3学期全ての美術の授業7回と政治の授業でも話し合いが行われた。

テーマは、「社会をよりよくするためのアピール力があるアート作品を、段ボールを用いて自由に制作してください」というシンブルなもの。社会科では、「ソーシャルデザイン」について理解するとともに、生徒自身が問題意識を持って課題に向きあい、協力してまとめていくことが求められた。美術科からは、「そこに何かを置けば、その場所は変化する。そして、人に何かを感じさせる。わくわくする、立ち止まってしまおう、引き込まれる、そんな空間を作ろう。」として、自らの感覚を大切に、アイデアを交流させて素材に向きあうことを求めた。

授業での生徒たちは、45分が短いと言わんばかりに真剣にモノづくりに取り組んだ。また、休み時間、放課後も美術室は人で溢れかえった。どんどん広がるイメージを、必死に形にして

いく様は、教員にとっても驚きであった。同時にそこは、美術室という名のアトリエ的空間となり、相互に刺激し合い、交流する場ともなっていた。

振り返れば、ある大きな枠組みの中で、それぞれの生徒のこれまでの経験や知識やアイデアを出し合いながら一つのものに作り上げるといふプロセスそのものが大きな学びであり、また、この活動が個々の学びを深める要素を十分に秘めていたと感じる。

これからの学びにむけて

結果として想像をはるかに超えた質の高い作品、アイデアの豊かな作品、コンセプトが明確な作品が飛び出した。決して教員主導ではない時間、空間がそこにはあった。

何度も話し合いを重ね、時にはぶつかりながらも、一つのテーマに向けて協同する姿に、真の学びを見る。そのことは、生徒の感想にも次のように表れている。

「今回の課題で一番学んだこと、感じたことは、アートは色々な形で表現できるということです。そしてアートにより、たくさんさんの思い、願いを表現できるということです。文字で訴えるより、アートの方が自然に頭に入ってきたし、残りやすいのでとても良いと思う。」当初、予想していたものとは全然違うものになっていった。それは、ぼく一人でやったことじゃないってことの証明だと思うし、グループでやる楽しさ、凄さを痛感することにもつながった。」多くの生徒が仲間と協同する中で互いを尊重し合い、モノづくりに真剣に向きあった中で

喜びや達成感、学びを記していた。

改善すべき点に残りつつ、教員がファシリテーターとなって生徒が自らの問いを深め、学びを構築していく授業の糸口が、この実践を通して少し見えた気がしている。ある生徒がこう言い残していた。

「僕、悔しいけどこの授業を受けてから、電車に乗っていても歩いていても、これ使えるかもとか、この色合い良いとか、この形良いとか、この広告もアートなんやろなとか、このデザインかっこいいとか、なんか色々さがしたり考えたりしてしまっうねん。」

学校での学びが単なる知識を詰め込む座学から活動的に、個人の学びから協同の中での学びに変化しつつある今、授業作りについても、生徒自身が探求し、互いに刺激し合いながら交流し、共有することが重視されている。常に学びの空間、時間の創造を試行錯誤し更新していく柔軟さが求められていると思う。



制作風景



社会科メディアスペースでの展示風景

同志社 クローズ・アップ

旧高校2年(現高校3年)オーストラリア修学旅行

香里中学校・高等学校教諭

総務副主任

篠田昌春しのだ まさはる

持った生徒もいたようです。

本校においては、国際主義教育の一環として高校生に対して海外修学旅行を実施しております。2008年度まではハワイへ、2009年度からはオーストラリアに舞台を移し、生徒たちの高校時代の思い出の1ページとなるように取り組んできました。

昨年度(2013年度)の高校2年生のオーストラリア修学旅行も、素晴らしい天候に恵まれて楽しい思い出をたくさん作ることができたようです。

7日間のオーストラリア滞在の日程を追いつつ、特に印象に残った出来事を中心に紹介させていただきます。

・初日(先発隊…1月26日(日) 後発隊…1月27日(月))

1月26日(後発隊は1月27日)、予定通り9時に関西国際空港を出発。約8時間のフライトを経て、シンガポール空港に着。シンガポール空港で3時間ほど待機したのちに、シドニー空港に翌1月27日(後発隊は1月28日)到着。シンガポール空港では、日本の空港内では見られないようなモニュメント(ジャングルのような)も見られ、それを見て、異国にきた実感を

・2日目(先発隊…1月27日(月) 後発隊…1月28日(火))

シドニー空港に到着後、オペラハウス、ミセスマックオリーズチエアなどを見学し、昼食をダーリングハーバーでとりました。日本ではなかなか見かけないサイズのハンバーガーに驚きながらもおいしくいただきました。レストランから見える港の風景もとてもすてきでした。

昼食後はフェザータール動物園でオーストラリアゆかりの動物を見学。一番の注目はコアラとの記念撮影でした。オーストラリアならではの記念撮影に、生徒は皆大喜び、これまでの長旅の疲れも吹っ飛びました。

この日は、もうひとつ嬉しいこともありまして。オーストラリアのスーパーマーケットに初めて買い物に出かけたのですが、その際に他のお客さんから「レジの列にきちんと並んで、礼儀正しくて、何て素晴らしい生徒たちでしょう!」とお褒めの言葉もいただきました。私たちにとっては当たり前のことであっても、海外でこうして褒められると、嬉しいものです。

・3日目(先発隊…1月28日(火) 後発隊…1月29日(水))
ジェノランケープ、ブルーマウンテン、シーニックワールド、そしてエコーポイントそれぞれ訪れ、豊かなオーストラリアの自然を満喫することができました。エコーポイントからはブルーマウンテンの景色を眺め、日本では決して見られない、広大な自然を目の当たりにしました。

シーニックワールドではロープウェイとトロッコに乗りしました。傾斜角52度もあるトロッコに乗り、たった2分間の乗車でしたが、生徒からはスリル満点の叫び声が…。

ジェノランケープという鍾乳洞にも見学に行きました。英語のガイドによる説明を受けながらの鍾乳洞見学。3億年もの時の流れを感じる、神秘的な探検となりました。

この日の宿泊はメルセセンターという、体験学習ができる宿舎でした。夕食後、広場でキャンプファイアー。パンケーキや紅茶もいただきながら、コンサートが開かれたり、天文部による星座の講座が行われたりしました。

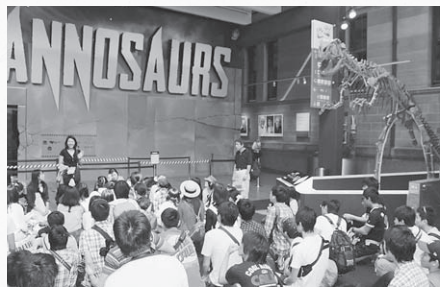
・4日目(先発隊…1月29日(水) 後発隊…1月30日(木))

午前中はメルセ研修センターにて様々な活動に取り組みました。羊の毛刈りショーを見た後は、アーチェリー、ムチならし、ブーメラン投げ、乗馬、ヘイライド、ペイント、カヌー、エサやり、などの各アクティビティに取り組みました。

午後はシドニー市内へ移動。ダリリングハーバーで自由昼食をとった後は、マンリービーチへ。海岸での記念撮影や、近くにある店でショッピングも楽しみました。

・オーストラリア修学旅行を終えて

2014年度の高校修学旅行からは、また行き先をハワイに戻すことになりました。ハワイでは現地の高校生との交流、平和学習の一環としてのパールハーバーへ、また環境学習の一環としてハナウマ湾への訪問、ワイキキを中心とした班別自主研修なども予定されております。今回のオーストラリア修学旅行では、こういった平和学習や学校訪問といったことはありませんでしたが、オーストラリアでしか体験できないような自然に触れ合い、またおらかなオーストラリア人にも出会うことができ、天候にも恵まれ、生徒たちにとっても輝かしい思い出の1ページを作ることができました。時差に影響を受けないのもオーストラリア修学旅行の利点だったと思います。この思い出を糧に、この先の高校生活を充実させてほしいと願っております。



5日目に訪れたオーストラリア博物館



3日目にされたキャンプファイアー



6日目に訪れたミッドランドポイント



4日目に訪れたマンリービーチ

・5日目(先発隊…1月30日(木) 後発隊…1月31日(金))

この日は班別自主研修が行われ、まずはオーストラリア博物館へ向かいました。(後発隊は2月1日に博物館へ)生徒たちの興味を引いたのは恐竜とアボリジニーの歴史について。入口にある恐竜の骨の展示のスケールの大きさにびっくり。展示にはアボリジニーの歴史や、芸術作品も見ることができました。

オーストラリア博物館を出た後は、班別でのシドニー市内探索のスタート。シドニー天文台、聖メアリー大聖堂、シドニー水族館、ハイッドパークなどを訪れ、生徒たちは楽しく市内観光ができました。

この日、後発隊もホテルに到着し、久しぶりに学年全体がそろいました。懐かしい笑顔の再会に、みんなとても嬉しそうでした。

・6日目(1月31日(金))

先発隊の人にとってはオーストラリア滞在最終日。この日も含め、オーストラリアに来てからはずっと快晴でした。ホテルで朝食を済ませた後、クラス単位でミッドランドポイントへ移動。ハーバーブリッジを歩いて渡り、到着したクラスから記念撮影をしました。クラスごとの写真撮影が終わった後は、あちこちでオペラハウスを背景に記念撮影を楽しみました。

記念撮影終了後は、自由昼食をとり、シドニー空港へ。シンガポールを経由し、2月1日(土)(後発隊は2月2日(日)、関西国際空港に到着しました。